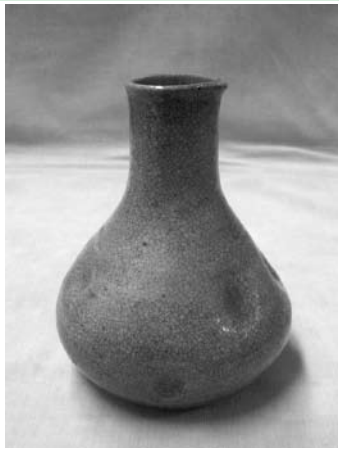


黒羽芭蕉の館だより ⑫

黒羽芭蕉の館コレクション展
「幕末・明治期の益子焼」

栃木県内には江戸時代から各所に窯場が存在し、やきものが生産されてきましたが、現在まで存続し、多くの人々にその名が知られ愛され続けているのは、益子焼と小砂焼といえるでしょう。その内、益子焼は嘉永5年(1852)、大塚啓三郎が開窯したことには始まります。江戸時代、芳賀郡益子村は黒羽藩領となっていましたので、幕末・維新期の益子焼は、同藩の支配と保護を受けて発展しました。



称平徳利(高さ12・8cm)

当時の特徴的な陶器としては、称平徳利があります。これは幕末期に郷奉行として益子に着任した三田称平に因むものです。彼はお酒好きだったようで、首の下に指先で凹ま

せた痕が数か所ある称平徳利を考案し、大塚啓三郎につくらせています。明治2年(1869)には、益子村18

名他2名が黒羽藩から窯を借り、農間余業として徳利・土瓶・土鍋などを焼成していました。それら商品(陶器)は鬼怒川の真岡河岸から船で江戸に運ばれ、日本橋瀬戸物町で扱われました。

その後、明治4年(1871)の廃藩置県により、益子焼は民窯として独自の道を歩むことになりました。

当館では、平成22年度に広瀬久之進氏(やきもの研究家)から幕末・明治期の益子焼約30点、渡辺陽一氏から称平徳利を寄贈されました。

そこで、これら陶器の数々を鑑賞していただくことを目的として、本年度の当館コレクション展を次のとおり開催いたします。

- **テーマ** 「幕末・明治期の益子焼」
- **会期** 2月11日(土・祝)〜2月19日(日)

- **会場** 黒羽芭蕉の館 研修室
- **展示資料** 称平徳利、白掛呉須絵菊文土瓶、飛鉦鉛釉土鍋など約30点

- **観覧料** 大人3000円(2000円)、小中学生1000円(500円)
- ※()内は20名以上団体料金

■ **問い合わせ**
黒羽芭蕉の館
TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 ②⑥

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、ふれあいの丘のシャトー・エスポワールの南側から東方にある大工房へと続く小道の付近にある彫刻です。



ベイスージュ ウヴェール

PAYSAGE OUVERT (開かれた風景)
シルヴィー・ルジュンヌ フランス 2000年



シルヴィー・ルジュンヌさん

不定形で、なんとも不可思議な形をしています。深い亀裂が縦横に走り、上面は複雑に入り組んだ凸凹の岩肌、一方側面では滑らかな岩肌を見せています。時には風に、時には水に、時には光にさらされ、自然界のさまざまな刺激を受けてできあがった自然の造形美を思わせます。

じつとながめていると、不定形な作品から、なんとなく「生命力」とか、「宇宙」とかいった言葉で表現されるような壮大な世界を連想させてくれます。

作者は、1953年フランスのパリ生まれのシルヴィー・ルジュンヌさん。76年にパリ第4大学数学科で数学教職を取得後、78年にパリ国立高等美術学校を卒業。多くの受賞歴もあり、91年から93年までのスペイン国費留学後には、パリ市立美術学校の教授を務めています。

設置場所案内図(★印)



■ **問い合わせ**

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718